

米欧亜回覧

第68号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

「どう読んだか、どう感じたか」を述べ合おう！

「小論集」の合評会、十月二十八日(日)

十月の全体例会は、当会設立十五周年記念出版の「小論集」を讀んでの合評会となる。全編を丹念に讀んでコメントすることは大変なことですが、興味のある小論(一編でも二編でも結構)についてのコメントなら多くの人が出来ると思います。出席できる方は会場で、都合で出席出来ない方は、ぜひ、感想やコメントをメールやファックスでお寄せ下さい。短いものはそのまま、長いものは要約して会場で紹介したいと思いません。

この「小論集」には、複眼で視た「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」が表出されており、当会メンバーの多彩さ、その着眼



点と問題意識、キャリアと感性と考究がここに見られます。会場は、五周年記念、十周年記念の国際シンポジウムを開催した想い出の「学術総合センター」です。関心のある知人や友人もどうぞお誘い下さい。
パネLDiscussion
八月四日、国際文化会館
今、明治維新と岩倉使節団の意義を問う！盛況！
今回は、今日の問題を論じる「グローバルジャパン研究会」の担当により、パネLDiscussionカッション「今、岩倉使節団の意義を問う」が開催された。吹田尚一氏(元三菱総研常務、敬愛大学教授)から総括的な視点で、石坂芳男氏(元トヨタ自動車副社長)、塚本弘氏(元ジェトロ副理事長)、石垣慎信氏(元日本IBM、アット東京社長)からそれぞれのキャリアを踏まえた発表があり、泉三郎氏のモデレーターで行われた。
(詳細は二・三頁)



パネLDiscussion (8月4日全体例会)

岩倉使節団派遣百四十年記念公開講演会「開催！」

岩倉使節団

西洋文明への挑戦

十二月十五日(土)、会場は

横濱開港資料館、講堂。

これは横濱市教育委員会と当会の共催で行われるもので、講師は泉三郎氏、使節団出航の記念すべき地「横濱開港資料館」で行われる。無料。定員があるので事前に申込みが必要。(当会事務局へ)

岩倉使節団の現代的意義

十一月二十七日(火)一六時

四十分〜十八時。日本大学国際関係学部主催、講師は泉三郎氏。東海道線三島駅北口の日本大学校舎、山田顕義(使節団同行)記念ホールで行われる。

いづれも公開なので参加歓迎。知人友人で関心のある方にはご案内をお願いします。

イー・オリオン氏に「ジャンケン文明論」なる書(新潮新書)があることをご存じだろうか。かつてベストセラー「縮み志向の日本人」を書いて話題となった、あの韓国の代表的文化人、初代文化相も務めた李御寧氏である。その「まえがき」にこうある。

『なにかを決めるとき、西洋の子どもはコイン投げをするが、アジアの子どもたちはジャンケンをする。表か裏かその片面だけで決めるコインは「実体」であり「モノローグ」である。だが、相手の手と取り組んで意味を生むジャンケンは「関係」であり「ダイアローグ」だ』

泰平の眠りを覚ます侵犯船 中・韓・日の問題に「ジャンケンの知恵」?

泉 三郎

コイン投げは西洋の黒白、勝ち負けの二元論に通じ、ジャンケンには東洋の黒白グレイ、勝ち負け無しの多元論に通じている。そして、道教・儒教・仏教の習合や漢字・ハングル・仮名の共用にもみられるように、中・韓・日の文化の諸相にはその思想が深く浸透している。その関係は、誰も勝たない、誰も負けない「東洋独自の循環型の文明」を含蓄しており、二項対立で「衝突しか生まない西洋のコイン投げ文明」の関係を超越して、平和と融合をもたらすという主張なのである。

つまり、ジャンケンのグー(石)とチョキ(鉋)とパー(紙)は、それぞれ強さと弱さをもっており、柔らかい「ヒラテ」が固い「コブシ」に勝つところにジャンケンの「徳」があるという。そして「大陸の中国と島の日本」の間、韓半島のチョキがあつて、はじめて競争しながらも独り勝ちのないアジアのダイナミックな丸い輪がつけられる」と書いています。

いま、中・韓・日は、尖閣や竹島で、お互いにコブシを挙げ、チョキを突きつけている。が、それぞれの国にもう一つの柔らかい「ヒラテ」があることを想起しなくてはならない。宇宙船「地球号」はもはや「勝ち負け」では持続できない時にきている。二十一世紀は「西洋の論理」でなく「東洋の深い知恵」、二次元でなく、三次元での柔らかい大きな手でコブシはむるん缺までも包みこむことはできないものだろうか。

第64回 全体例会

パネルディスカッション
今、明治維新と岩倉使節団の意義を問う
〜平成維新をどうすすめるか？日本の未来は？

第六十四回全体例会は八月四日(土)、国際文化会館セミナールーム四〇三・四〇四において開催された。出席者は約四十名。

十三時三十分より始められた全体例会第一部では、まず泉理事長から現況報告をかねたオープニングスピーチ、つづいて石垣事務局長から会費・NPO活動支援金・記念小論集賛助金についての進捗状況の報告が行われた。次に、会員待望の「十五周



記念小論集刊行を報告する山田哲司編集委員長(左)
例会受付に積まれた記念小論集(右)



年記念小論集」の刊行報告が行われた。当日受付に高く積み上げられた小論集は出席者に配布され、真新しい小論集を手許に見ながらの報告となった。先ず山田哲司編集委員長から刊行までの経緯や永年にわたりアーカイブ(電子的な書庫)に蓄積された膨大な知的資産を整理し纏め上げる難しさと喜び、参加された著作者への感謝が語られた。また、中山委員からも多くの題材を一冊にまとめ上げる工夫や製本までの苦労談が披露され、出席の会員からは編集委員会のメンバーへの賞賛の拍手が鳴りやまなかった。

小休憩の後、グローバルジャパン研究会担当のパネルディスカッション「今、明治維新と岩倉使節団の意義を問う」〜平成維新をどうすすめるのか？日本の未来は？〜が行われた。

今、日本は間違いなく歴史的な大転換期に直面しており、近代における科学技術と経済の著しい進歩・発展の結果、世界的にも数百年単位の転換期にある。平成の日本は幕末維新期の状況に酷似して

おり、革命的な変化を必要としている。この問題に正面から向き合い、もし私たちが幕末の志士らであったならば、どのような政策や施策を掲げて平成維新を進めるのかを議論しようという趣旨であった。泉三郎氏をモデレーターに、見識と経験に富む当会々員の四名のパネラー参加を得て、大変ユニークで興味深いパネルディスカッションとなった。多くの参加者の共感を呼んだ例会後の懇親会は約二十名の参加を得て、日頃と少し趣向を変へ麻布の老舗蕎麦屋で行われたが、パネルに続き大いに議論が盛り上がり楽しい時を過ごした。

(文責) 石垣 禎信

◇パネルディスカッションの要旨

モデレーターの泉三郎氏から、今回の趣旨とパネルの進め方の説明の後、各パネラーからの約十五分の発表が行われた。(発言順に論旨を記載)

吹田尚一氏(元三菱総研)

・現在の「国家的危機」の原因はグローバル化と



吹田尚一氏

少子高齢化

・二十一世紀の日本の位置と基本スタンス、それに基づく「新五ヶ条」の認識で国家社会のあらゆる面で発想を根本的に変えていくことが出発点 例えば日本自身がモデルをつくること、受信から発信へ、リスクを恐れない新時代の課題への取り組み等々

・具体的提案としては活力発揮の支援、産業の活性化のための「産業構造の変革」と「企業経営の再編成」が不可欠

・世界の中の日本のあり方を創り上げるためには「情報収集と分析」の体制の強化と特に「真の知的認識力を有する人材の活用」が必要

・更にアジアに近接する日本の優位性の発揮と昨今大きな問題となった中国との関係を含めた「安全保障の自己矛盾的あり方」の覚悟が必要

石坂芳男氏(元トヨタ自動車)

・日本の人口問題について幅広い統計の紹介と深い分析を披露、このままでは課題ばかりが見えるがこの中にこそ対応のヒントがある

・少子高齢化(総人口と合計特殊出生率の推移、年齢構成の国際比較ほか)

・労働力(労働人口と日労働人口、一人当たりのGDP、二十〜三十代女性の就業率と出生率)



パネルディスカッションのパネラーと会場俯瞰写真(近藤理事撮影)

・農業(農業従事者の高齢化、主業農家と農業関係者の比率ほか)

・主な対応策としては、就労とその環境作りや経営参加の推進による「女性パワーの活用」が不可欠、日本が元気になる。

・さらに、日本への留学生・研修生を中心とした計画的移民の推進が労働力・競争力の観点からも極めて有効である

・独創的な技術開発、ICT分野、環境技術、ロボットな



塚本弘氏

・これからどうすべきかについて、「リアリズムと責任」の徹底が不可欠、どこまで悪いのか誰が負担し責任を負うのかを勇気をもって明確にすべき、具体的には財政赤

・現状から悲観的になる世論が大勢だが、日本と日本人の実力から楽観的に考えたほうが良い。

・岩倉使節団が今の日本を訪問したら「何と立派な国に発展したものか！」と感激するだろう。GDP世界三位、世界一の長寿国、海外投資大

・「賢いモノ造り」への挑戦が鍵となる。



石坂芳男氏

字(社会保障制度、生活保護、公務員改革)やエネルギー問題(原発再稼働、再生可能エネルギー)の解決



石垣禎信氏

・明治維新を経て世界の中のリーダー国になるために、政府も国民もどれほど頭と体を使ったかを理解すべき、人材

・四十一年周期(?)の日本の盛衰、日露戦争の勝利(一九〇五)を頂点とし第二次世界大戦終戦(一九四五)を底とする

・具体的な方向として「グローバル環境」での対応力の強化、ジャパニーズイングリッシュでもOK、ともかく喋る事。韓国や中国の国際舞台での発信力に負けてはいけない。

・「知・情・意」の結合と「リスクを取る覚悟」が不可欠。



テーブルに砂時計を用意したモデレーター 泉三郎氏

・大阪維新の会の評価と期待
・日本人の安全と安心の捉え方
・中国の報復はあり得るか?
・その対策は?
・官僚制度のリアリティーと

・四人のパネラーの多彩な経験と豊かな個性を反映した興味深い発表の後、「パネラーの意見は全て妥当、今すぐにも政府トップと入れ替わって欲しい!」との過激な賞賛を

・「グローバル化」と「デジタル化」、自分自身の体験から語ると、日本と日本人のリーダーシップはその気になれば意外に凄い。再度世界のリーダーになるには国と国民に

・明治と平成の違いは急速な「グローバル化」と「デジタル化」、自分自身の体験から語ると、日本と日本人のリーダーシップはその気になれば意外に凄い。再度世界のリーダーになるには国と国民に

・明治と平成の違いは急速な「グローバル化」と「デジタル化」、自分自身の体験から語ると、日本と日本人のリーダーシップはその気になれば意外に凄い。再度世界のリーダーになるには国と国民に

への投資から情報の収集、諸外国への発信と説得の歴史を見直し、実績として自信を持つても良い。

年会費・十五周年記念小論集発刊賛助金・NPO活動支援寄付 お払込みのお礼とご報告 〜認定NPOの移行が可能に〜

平成二十四年九月末日現在で百三十一名の会員およびご支援者の皆様から総額百四十二万円の払込みを頂きました。記念小論集の賛助は六十二名、NPO活動支援の寄付は百二名となつています。皆様のご支援とご協力に、改めて厚くお礼を申し上げます。

三名の皆様にも重ねてお礼を申し上げます。「米欧亜回覧の会」の会の更なる進化と発展のご期待に沿えるように、関係者一同努力を続けたいと願っております。

事務局長 石垣禎信

また、寄付金の税額控除可能となる「認定非営利活動法人」へ移行するためには百名以上の参加が条件となっておりましたが、これを見事に達成することができました。特に会員外からのご支援をいただいた三十

改革の可能性
・脱工業化社会に向けての日本の戦略は?
最後にモデレーターを務めた泉理事長の「皆様のご協力で大変有意義で面白いパネルになり嬉しい。これを第一歩として今後も引き続き、この現代の問題に積極的に取り組んでいきたい。」とのまとめの言葉で約二時間半に及ぶパネルを終了した。



参加者も活発な質問や意見で参加

(写真) 近藤義彦、橋本吉信
(文責) 石垣 禎信

トピックス

岩倉使節団が持ち帰った? ウェブスター英語大辞典

法政大学多摩図書館に所蔵されている、一八六五年増補改訂版・ウェブスター英語大辞典の第一巻の表表紙には、「日本天皇特命全権大使 正二位 岩倉具視」と書かれた英文の銘が入っている。

使節団または岩倉具視が米滞在中に購入、もしくは寄贈されたものと推定されているこの辞典は、岩倉具視の曾孫である岩倉具栄氏が教授に就任された一九四八年に法政大学に寄贈されたものである。

黒い革張りで金箔の型押しがされた豪華な二巻本の辞典は保存状態が極めてよく、百四十年前の姿を維持している。(法政大学ホームページより)



「SIONII TOMOMI IWAKURA」の文字が入った英文ラベル



岩倉使節団―誇り高き男たちの物語(祥伝社黄金文庫)発刊

泉三郎著「誇り高き日本人―国の命運を背負った岩倉使節団の物語」(二〇〇八・P.H.P.研究所)の文庫版が、内容を充実させて発刊された。

使節団の船出から欧州までの各編、そして帰国編の中心を辿る。最後に、主要メンバー、留学生や留守政府要人までの人物に焦点を合わせた章を加え、泉氏の長年の研究が集大成されている。七百七十五頁の大部でありながらコンパクトなサイズで読みやすく、求めやすい価格となっている。

是非、ご一読を。また、岩倉使節団や日本の近現代史に関心を持つ若い方々にもお薦めください。
泉三郎著
「岩倉使節団―誇り高き男たちの物語」
祥伝社黄金文庫
税込み千五百円

ISBN: 9784396315894



歴史部会報

担当幹事 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■岩倉使節団の裏方、その裏方団の頭領、田邊蓮舟、人生を三回生きた「三生の人」(講師(田邊康雄氏)五月二十一日開催、使節団の書記官長を務めた田邊太一を子孫が紹介した。一八三一(天保二)年、太一は徳川將軍家譜代の旗本―高名な漢学者、昌平黌教授田邊石庵―の家に生まれた。が、次男であり「部屋住み」の身。他家への養子しか出世の道がない。しかし太一は、まず父親から漢学を習い、さらに蘭語、仏語、英語をマスターして自力で旗本の地位を勝ち取った。幕府外国奉行所に大政奉還まで約十年間在籍し、その内六年間は外国奉行支配組頭―現在でいうと外務省事務次官―として重責をつとめた。

幕府時代の太一は『柳営(幕閣)』の意向に反して、「開国自由貿易・富国強兵」を主張。その結果、二度も謹慎・蟄居の処罰を受けた。『柳営』は開国の必要性を知って通商条約も結んでいたのに、朝意を慮って表面上は鎖攘を唱えていたのだ。処罰を受けた間も「組頭同様に出

仕せよ」との奇妙な罰だった。太一無しには列強を相手とした外国奉行所の実務遂行が困難だった故。

江戸開城の際は「目付」に昇格し、徳川慶喜の前で水野忠徳、小栗忠順と共に「徹底抗戦」を主張して勝海舟と対峙した。が、敗れて横浜―知己の外国人が多く居住―に行き、五稜郭に立て籠もる榎本武揚、大鳥圭介、荒井郁之助を外交面と資金面で支援した。明治二年五月に榎本等が降伏するや、請われて徳川家兵学校(沼津)に一等教授として赴任した。

太一は旧幕府の文官には珍しく、欧米の高度の技術を学んで来た。長崎海軍伝習所三期生として榎本武揚、荒井郁之助等と共にオランダ人から学んだもの。その上、遣欧使節の組頭としてフランスへ二度も出張したので、外国事情に詳しく、何れも沼津へ使者を送り、三顧の礼をもって外務省へ「No.5」(外務少丞)として迎え入れた。

入省後太一は、大隈重信に請われて外遊プランを立案した。ところが大久保利通がそれを見て大隈を外し、『岩倉使節団』を編成して太一を書記官長に据えた。書記官団は、訪問先高官のアポを取ったり、移動計画を立てたり、

日本からの為替送金など多忙を極めた。事務方随行員のほぼ全員が旧幕臣だったので、太一はまとめ役だった。

「不平等条約改定」が使節団の目的だったので、条約成立事情をよく知る、また当事者でもあった太一は「やれるものなら、やってみろ」と冷やかかな目でみていた。また使節団が―伊藤博文を除いて―外国事情に驚く姿を冷やかな目でみていた。岩倉具視が急遽「見聞記録を詳細に残せ」と事務方随行員ではない、かつ、個人的関係の深い久米邦武に命じたことは、外国事情を知らずに『攘夷』を唱えていた愚を暴露したとみられた。しかし太一は、列強国を知って変身する使節団に好感を持ち、よく協力した。密議にも参画してもっとも信頼された。

故あって薩摩嫌いの太一だったが、大久保とはよかつた。請われて清国大使も引き受けたが、残念なことに大久保は道半ばにして倒れた。よって太一はその五年後に外務省を去った。もはや庇護者がいなくなった新政府において、旧幕府出身の太一には―他の多くの新政府に出仕した旗本同様―身の置き所が見出せなかつたのだ。太一の私生活は大荒れに荒れた。当時の花柳界で「御前様」と言え

ば、太一か福地源一郎だった。しかし太一には、六年間の清国勤務の際にマスターした『紅樓夢』(白話文の長編小説)があった。漢学の上に積み増した支那現代文学をもつて、島崎藤村等の明治の文壇に大きな影響を与えた。文人として自由に生きる道を選んだのだ。

明治後期には幕府事情の「生き字引」と言われ、勧められて『幕末外交談』なる歴史的名著を著した。晩年、薩長に偏りすぎていると不評だった『維新資料編纂委員』に追加任命され、薩長政府に無視されていた『柳営』の功績を紹介した。

—中略—

太一は漢学者、外交官、文人として三生を生きた。人のために尽くし、さらには国家のためなら何人にも迎合しなかった。見ていて「すがすがしい」思いのする生き方。蓮舟と号し、『幕末の三舟』として知られる勝海舟、山岡鉄舟、高橋泥舟に木村芥舟または田邊蓮舟を加えて『幕末の四舟』と言われる。

(文責) 田邊 康雄

■薩摩藩第二次米留學生—大原令之助(吉原重俊)を語る

(講師:吉原重和)

七月二十四日開催。

一八六六年五月に雨の長崎からポルトガル船で密かに出

国していった五名の薩摩藩米留學生が居た。その内の一人の大原令之助は、一八七二年岩倉使節団にワシントンで現地参加した三名の書記官の内の一人であった事は余り知られていない。三名とは新島襄、杉浦弘蔵と大原である。

大原令之助の實の名は吉原重俊という寺田屋騒動や薩英戦争に参加した攘夷派の薩摩藩士であった。彼は米留學生中に新島襄とも交流があった。彼ら三人の共通点は留學時代に米国において洗礼を受けたクリスチャンであった。

本日の発表は吉原重俊の曾孫にあたる吉原重和が行い、一八六五年に英国留學の為にグラバーの船で密航した十九名の薩摩藩英国留學生と併せて薩摩藩の留學政策について発表を行った。イェール大学を卒業した大原はヨーロッパに渡り紙幣印刷の監督をしていたが使節団参加の為に杉浦弘蔵とともに米国へ呼び戻された。グラント大統領の謁見に参加した後、大久保利通や伊藤博文に随行して日本にとり返りしたが、再びワシントンに戻って来た時に、条約改定交渉は中止となり使節団は英国へと旅だつていった。

英国に政体調査のため留

まった重俊は、帰国後松方正義に推されて明治十五年に日本銀行の初代総裁と成ったが

明治二十年に現職のまま死去した。

長州ファイブと呼ばれる伊藤博文達の長州藩留學生はひたすら科学技術の修得に努めたが、薩摩藩留學生は欧米の進んだ科学技術の背後にあるキリスト教の理解へと進み、多くの留學生達がクリスチャンと成った。両者の差はどこから来るのか議論と成ったが長州ファイブの学んだ英国とプロテスタント宣教の盛んだった米国との差、あるいは長州は吉田松陰の教えが大きかったのではという意見も出された。しかしその後留學生規則が制定され彼らの多くが帰国後は沈黙してしまった。

(文責) 吉原 重和

■読書会『最後の将軍』を読んで、徳川慶喜を語る

九月二十日開催、出席者十四名。

徳川慶喜ほど、歴史家の間でも、毀誉褒貶の激しい歴史的人物は少ない。本当の彼の実像は果して奈辺にありや。これが、司馬遼太郎著の『最後の将軍』を材料にして、徳川慶喜論を皆で考えようとした読書会の原点にある。

果して、今回の読書会でも、評価は大きく割れた。上司・リーダーとしては鼻持ちならない、裏切りの多い、臆病で、卑怯な、人格的に問題の多い人物で、知能は高かつ

たかも知れないが、あまりにも戦略的に過ぎ、案外、幕府を守る胆力もなかったのではないか、彼は結局、頼朝以来七百年続いた武家政権と、二百六十年の徳川幕府を放棄した張本人であるというもの。

否、結果的に日本を異国の侵略から防いだ明治維新実現の立役者の一人、その点では評価されて然るべきだという消極的評価論。更には、明治維新の最大の立役者はやはり慶喜をおいてない。もし、最後の将軍が、慶喜以外の者であつたら、絶対恭順を貫いての無血開城で、平和的な大政奉還と明治維新が実現できなかったという積極的評価論まで、大別して三つの意見に分かれた。

この評価の落差の原因は、著者司馬遼太郎の、慶喜論の影響が大きいかもしれない。司馬は、慶喜を「稀代の名君か、唯の好色の徒か」の視点で、明晰な頭脳と弁舌は爽やかで役者のような男と認めながらも、父・斉昭譲りの精力絶倫で一晩も女なしでは過ごせない男で、且つ「二心殿」と言われるほど、再三再四、意見・命令を翻しては周辺の徒者を振り回し続けた変節の徒というニュアンスで表現している。そこで、司馬は果たして歴史家か、小説家かという議論となり、やはり、フィク

ションである限り、司馬の慶喜の見方を全面的に歴史的事実と考えるべきではないという事に落ち着いた。

一方、積極的に慶喜を評価する者は、慶喜は早くから「百策を施しても、百論を論じても、時勢という魔物には勝てぬ」と時勢を見極めており、將軍職を継いだころから弱体化しつつある幕府の命運をそう先ではないと見定め、幕府の幕引後の自分の名分を考えた。水戸家出身の彼は、徳川光圀以来の秘伝である勤王の思想「もし江戸の徳川家と京の朝廷との間に、弓矢のことがあれば、潔く京を奉ぜよ」を最後の抛り所として、朝敵とならぬ道、絶対恭順をひたすら貫いた。そう考えれば、彼は將軍職にあつた一年余の最後の晴れの舞台を見事に演じきった千両役者でもあつた。そして、明治維新後四十四年後七十七歳で死ぬまで、見事に沈黙と生涯恭順を貫いて、市井のひとりとして生きた。並みな人ではできない、やはり稀代の名君であつた言えようと。だが、それは幕臣達から見れば、身勝手な行為と見えたに違いなく、評価は良いはずがない。

(文責) 小野 博正

実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp



第百六十二回

六月十四日開催、出席者八名。第三十三巻「ニューキャスルノ記(上)」、三十四巻同(下)一九七二年十月二十一日一行(註・木戸、伊藤を除く五人)はエディンバラから南六十マイルのガラシールズという小都市に入った。ラ



第162回読む会(小林富士雄氏) 写真:橋本吉信氏

シヤ製造工場見学のためである(註・ラシヤは軍服用を想定したものか)。ここで英国の富は、石炭と鉄とで器械を動かし綿毛麻の紡績で築いた、そのもとは理化学の発展によるもので、東西の産業の発展はたかだか五十年の差に過ぎない云々という持論を展開し、「西洋、東洋ノ開花

ハ、乾坤ヲ別ニセルニ非ス、厚生利用ノ道ハ、豈ニ東西異理ナランヤ」と結ぶ。そのあとメルローズ教会の廃墟を見学し、ニューキャスル(Newcastle upon Tyne)に到着する。

翌二十二日、アームストロングの案内で彼の器械・武器工場をみてまわる。並んだ大砲群(いわゆるアームストロング砲)の説明とガトリング砲の実射に驚く(註・彼の説明は顧客としての使節団を意

識している)。そのあととも彼も一緒に近くの炭坑で入坑を体験する(当時この地域は石炭産出で有名)。一二四〇年に採掘許可された石炭は煤煙が有毒でありとして禁止され木に切り替えたが、その二〇年後に石炭使用解除され、以降石炭使用はヨーロッパに広まったという、石炭・木質燃料代替の歴史、そして急増する英国の石炭消費量のため、このままでは六百三十六年で消費し尽くすと述べる。

翌日の二十三日はティン川沿いの工場群を巡る。当日は好天気にもかかわらず、林立する煙突からはき出す煤煙で太陽もよく見えない。銅、次いで鉛の冶金工場、最後にソーダ製造工場の工程を見て回り懸命に叙述するが、いかんせん、いづれも視察団の手に余る感じ。「一時間匆匆ニ

看過シ得ヘキモンアラス、馬ヲ走ラシメテ燈ヲミタルカ如シ」、「一時間匆匆ニ看過シ得ヘキモンアラス、馬ヲ走ラシメテ燈ヲミタルカ如シ」、「此日回覧ノ場多ク、尤モ倉卒ニテ、何モ詳カナル能ハス」などと、詰め込み過ぎの日程を反省する言葉が並ぶ。この上、夕方には河口の防波堤で海中作業や難破船救助の演習を見学し、更に夜九時か

ら天文台を見学し超過密の一日を終わる。(文責) 小林 富士雄

第百六十三回

映画鑑賞と納涼の集い(歴史部会と共催) 七月十二日(木)〜十三日(金)、「奥多摩園」に十一名が参加して開催された。

第一日目は、朝日新聞に連載された大佛次郎原作の長編史伝「天皇の世紀」を、夕食を挟んで五時間余に亘り鑑賞。一九七一年に朝日放送で放映され、幕末、明治維新の志士や庶民達の姿を描いた話題作品である。

今年「英国篇」を学んでいる関連で、第二日目は、日系英国人作家のカズオ・イシグロ原作の英国映画「日の名残り」を鑑賞。格式を重んじる英国貴族に一生を捧げてきたストイックな老執事の半生を回顧し、職務と愛の葛藤を描いた人間ドラマであった。

奥多摩園は、「秩父多摩甲斐国立公園」内に在り、御岳に近い多摩川の清流に沿った緑豊かな敷地三万八千㎡のブリヂストンの保養所(石橋正二郎氏の元別荘)で、納涼・散策・親睦を兼ねた歴史映画鑑賞に格好の場所とされ、昨年に続き二日間、朝から深夜に亘って映画・食事・温泉・懇談が活発に楽しく行なわれた。

第百六十四回

九月十三日開催。第三十五巻ブラッドフォード市の記、第三十七巻スタツフォード州とワースリック州の記

明治五年九月二十二日、ニューキャッスル市を發ち、ブラッドフォード市に着いた。人口は一八七一年には15,827人で、ヨークシャー州の一都市である。この州はイングランド北部の大きな州で、面積は15,555平方キロ、人口は1,195,569人に及ぶ。英国内陸部における羊毛紡績と羊皮製造の主産地である。

二十三日、ソールテア村に赴いた。ここは二十年前までは荒野であったが、サー・タィタス・ソールトが、アルパカの紡織業をはじめて以来、商工業者が数多く集まり、人



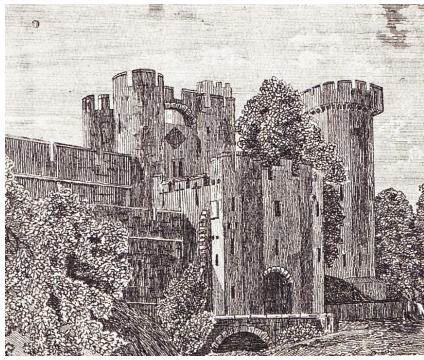
読む会・映画鑑賞と納涼の集い

口五千を数える大きな村となっていた。

汽車に乗ってマニングム村にも行った。リスター氏が作った絹の大きな紡織工場がある。英国には桑も蚕もない。原料は、中国や日本で用いないくず繭やくず糸などを仕入れて輸入し、機械で繊維を整えて紡ぎ、細く美しい糸にして絹織物を作っている。

二十四日、ハリファックス市に行った。駅から馬車で一キロたらずのダイーン・クロー毛織物工場に着いた。毛織物では英国一と称する大工場で、毛布や絨毯を織り、またビロードなどで作った毛氈のたぐいを織っている。

二十五日、朝から、ボールトン・アベイに行った。これは七百年前に建てられた古い教会で由緒ある聖地である。いまも完全に残っているが、古色蒼然としている。ボールトン川が背後を流れており、



ワーリック城(『実記』)

丘を背負い、平野を展望することができ、滝も懸っていてそのすぐれた風景は見るべきものがあつた。翌日十一時に汽車に乗って、午後一時にブラッドフォードに帰還した。

十月一日、シエフィールド市を發ち、汽車でバートン(アポン・トレント)の町に到着した。ここはスタッドフォード州の一都市で、ピールの産地なので、その工場に立ち寄つた。工場の面積は二十ヘクタール、中はまるで市街であつて、その曲折した通路を回ると二十キロもある。

午後五時半に汽車に乗り、七時十分にバーミンガム駅に到着した。

十月二日、九時半に汽車に乗り、二十四キロ走つてコヴェントリー市に行った。ここはワーリック州の首都で人口は59,470人、古くから有名な都市である。

まず、キャッシュ氏の紡織

英訳実記を読む会報告

担当幹事 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasakiyz1116@gmail.com



■第百三回
六月二十一日
開催。
Ch. 83. ウィーン万国博覧会
ウイーン万国博覧会見聞ノ記上
(pp. 9-24)
今回は出席者が史上最少の三人だけだったの

工場に行く。これは綿糸で専らレースを織るところである。ステイブンの氏の会社の絹織物工場は、綾織の製品を作っている。また、ローゼラム社の懐中時計製造工場は、ヨーロッパの時計産業で最大の工場だと言う。それから、市庁舎の前のセント・マイケル教会に行つた。これは五百年前に建てられた大きな教会で、塔の高さは約百十メートルあり、有名な聖地である。

汽車に乗ってワーリック市に行った。この市もワーリック州にある。人口は一万余、コヴェントリーと同じく名高い都市であり、もとワーリック伯爵の領地だったので、いまもその居城が厳然と残っている。市長邸で晚餐が供され、一家の人々と会食した。夜になって市長宅を辞去し、汽車に乗ってバーミンガムの宿に帰つた。

(文責) 小坂田 國雄

で、全十五頁を交代で音読するのが大変でしたが、快感も大きかつた。

久米は、ドナウ川の中洲ブラター公園の広大な敷地に建つたかさ百十二メートルの巨大なガラスドーム持つ建物に度肝を抜かれたせいか、万博会場の説明が仔細に延々と続くのには辟易した。しかし、この万博にはアジアからは日本だけが参加し、その詳細な記録が公にされていたのはすごいこと。我々世代は、ブラター公園と言え「第三の男」だが。

出席できなくなつた三原さんが郵送してくれた資料のおかげで順調に捗りました、ありがとうございます。

(文責) 岩崎 洋三

■第百四回
七月二十五日開催、三原氏担当。
Ch. 83. ウィーン万国博覧会見聞ノ記下 (pp. 25-41)

前章に続いて国別展示内容の詳細が描かれた部分で、その最後が日本。陶器や漆器に止まらず、神社や日本庭園まで含む日本の展示は好評を博した由だが、日本にとつても先進国の最新技術情報を手に入る上でこの上ないチャンスになつたようだ。

読書会終了後、同じ場所である英訳実記を読む会・第百回突破記念パーティーを盛大に開

催した。話も酒も止まるところを知らず、読書会の倍以上の時間が経つたところで、一年半後の全百巻読了記念パーティーの開催を約して解散した。

(文責) 岩崎 洋三

■第百五回
九月十九日開催、出席者六名。
Ch. 84. A Record of The Country of Switzerland

この章では、スイス国の成立にいたるまでの歴史、地理・地勢、軍事力、産業、農業、輸出入、学問教育、並びに国民を構成する民族及び使用言語などについての記述があり、加えてミュンヘンからチューリッヒへ向う途上のボーデン湖、チューリッヒ州及び同市、ベルンについての若干の記述がある。

なお、続く章は、「スイスの観光の記」及び「ベルン及びジュネーヴ市の記」である。この章の注は、十九項で長文のものも散見される。例を挙げれば、陶潜の「桃花源記」についての説明である。なお、陶潜は、馴染みのある陶淵明(淵明は字)である。不勉強の故であるが、人名・作品名を英語で表記されると、漢字名に辿り着くのが中々難しいと感じた。

(文責) 永島 脩一郎

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第六十回
六月三十日開催、出席者六名。第二編の第8巻「漫識特府(マンチエスタール)ノ記」の160頁から輪読。

マンチエスタールはもともと織維産業が中心の工業都市であるが、製鉄所を見学する。話が發展的に拡大して、日本政府の金融政策と為替の関係、ドルによる国際通貨体制の限界と中国元の国際化の戦略、など国際経済、金融の話題に及んだ。談論風発の気風は大切にしたものだ。

岩倉具視についての民放のビデオを観た。岩倉について最もシニカルな見解を持つ作家のひとりである加治将一氏の解説によるビデオである。歴史を多元的な視点で捉えてみることも歴史観を鍛えるという意味で大切かと考えこのビデオを取り上げた。

記念小論集掲載の筆者の小論「明治維新の不思議さ」について説明した。第二部の「明治維新を糺した岩倉使節団」は、「明治六年政変」の見解に関するため、直接説明をさせて貰う機会とした。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:090-4723-9705 FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。なお年会費などのお支払は下記の口座への郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2012年10月~12月の予定です

☆第65回全体例会

日時:10月28日(日) 13:30~16:45
(第1部)全体例会 13:30~14:00
(第2部)小論集「岩倉使節団と米欧回覧実記」の
合評会(小論編集委員会担当)
14:15~16:45

コメンテーター(予定):

藤原宣夫氏、永富邦雄氏、井出亜夫氏、
石垣禎信氏ほか

場所:一橋講堂中会議場1
東京都千代田区一ツ橋2-1-2
学術総合センター2F(03-4212-3900)

会費:例会2,000円

*例会後、有志による懇親会を予定しています。

☆実記を読む会

日時:11月8日(木)14:00~ 担当:鶴飼氏
12月13日(木)14:00~ 担当:泉氏

*忘年会

場所:国際文化会館401号室

会費:1,000円

☆英訳実記を読む会

日時:10月23日(火)14:00~ 担当:小坂田氏
11月22日(木)14:00~ 担当:斎藤氏
12月22日(木)14:00~ 担当:大森氏

場所:成城学園前(最寄り駅)

☆歴史部会

日程:10月22日(月)『高橋是清』(井上泰氏)
11月19日(月)『中江兆民』(芳野健二氏)
12月17日(月)『福沢諭吉』(泉三郎氏)

時間:18:00~21:00

場所:国際文化会館404号室

会費:1,000円

☆関西支部例会

日時:10月20日(土) 12:30集合~16:30
昼食懇談会を持ち、13時より会合。

場所:大阪弥生会館

会費:1,500円+昼食代1,000円くらい

編集後記

◇印刷所から、出来立ての設立十五周年記念小論集が八月の全体例会の会場に届き、参加した賛助金振込み者にも手渡すことができました。数日前まで微修正を繰り返しましたが、何とかお約束の全体例会に間に合わせる事ができました。印刷の技術革新を改めて実感しました。執筆者ならびに編集委員の皆さま、ご協力ありがとうございました。
◇八月全体例会報告(二頁)の下端にいつもと少しアングルの違う写真があることにお気づきでしょうか。これは、バーの先にカメラを取り付けて撮影できる近藤理事の「秘密兵器」によります。こちらは、東京オリピック取材や報道撮影によく使われたもので、新しい技術ではありませんが「新鮮」に感じます。
◇トピックス(四頁)掲載、岩倉具視の銘入りウェブスター英語大辞典の記事は、会員の岡松暁子さんがつけた法政大学のホームページにより紹介して頂き、感謝いたします。ところで、記念小論集の百九十七頁、校正ミスで「岡松」さんが「岡」さんとなっていました、お詫びいたします。(N)